

犬 齒

本
田
雅
子

家族葬に出席するための準備をしていたら

姉ちゃん 納棺にも来てよ

と言ってきたので仕事を断り上京した

二家族が集まる葬儀になるという

火葬場は広く大きな施設で

さすがに人口の多い都市は違う

骨上げとなり白い手袋をした職員の女性が

お年にしてはお骨が残っていらっしやるほうです

と言いながら 骨をまとめた

あれっ これ歯じゃないか

先の尖った一・五センチメートルほどのものが一つあった

そうです 犬歯です

母にしては大きい骨壺に犬歯も入った

母の住まいを片付けていたら

私が小学一年生の時に書いた国語のノートが出てきた

ひらがなの練習帳で古びたノートが何冊も紐で縛ってあった

一冊目のノートの初めは

「い」と「し」だった

字は死んでいた

全く生気が感じられなかった

この字を書いている自分を覚えている

ただ緊張していた 母の言うとおりに

きれいに書くのが使命だと思いい込んでいた

母ちゃんから解放されて

自由になりたい

遺影の母ちゃんは

犬歯を見せて笑っている